OPINION

オープンカレッジ

愛知淑徳大学
ビジネス学部教授
石坂 綾子氏

2014年―EUの命運を握るドイツ

『2014年はドイツにとって記念の年になる』この一文から、読者は何を連想するだろうか。多くの読者は、おそらく7月にブラジルで開催されたサッカー・ワールドカップでの優勝を思い浮かべることだろう。チーム全体の組織力・攻撃力の高さなど、優勝したドイツの戦いぶりには、多くの賞賛が寄せられた。この優勝によって2014年は明らかに記念の年となり、ドイツのサッカー史に新たな1ページを刻んだと言える。

しかし、本稿においてこれから述べる「記念の年」とは、ワールドカップでの優勝とはまったく別の内容を意味する。ドイツの雑誌『DE Magazin Deutschland』（2014年第1号）には、「記念の年2014」と題して、その意味が次のように述べられている。「今から100年前、第一次世界大戦が勃発し、75年前、第二次世界大戦の火ぶたが切られ、そして25年前、ベルリンの壁が倒れた。ことし2014年は、これら3つの歴史的な出来事を思い起こし、心を新たにするきっかけとなろう」そこには、2014年が過去を振り返り、未来を展望する節目の年であるというメッセージが込められているのである。

この『DE Magazin Deutschland』誌において指摘されているように、ここに挙げられた3つの出来事は、ドイツ史、ヨーロッパ史においてのみならず、20世紀史においても極めて重要で、その後の政治・経済・外交・社会面などにおいて、大きな影響を与えている。そのため、ドイツ国内では、3つの出来事を改めて思い起こすことによって、「ドイツの役割は何か、そこからいかなる責任が生じるのか」を論じる機運が高まっている。

以下では、ベルリンの壁の崩壊（1989年11月）が、その後のヨーロッパ連合（EU）におけるドイツのポジションに、どのような影響を与えたのかについて述べていきたい。その理由は、ここに挙げた歴史的な出来事の帰結として、EUの存在も指摘されているからである。それでは、壁の崩壊はEUに何をもたらしたのだろうか。崩壊後の1990年10月に、これまで分断されてきたドイツ連邦共和国（西ドイツ）とドイツ民主共和国（東ドイツ）が統一された。このドイツ統一によって、EUは新たな局面を迎えることになる。

2004年以降、歴史的、経済的にドイツと結びつきが深かった東ヨーロッパ諸国がEUに続々と加盟を果たし、その組織自体が東方へと大きく拡大していくこととなった。現在、EUにはポーランドやチェコ、ハンガリーなど東ヨーロッパ諸国を含む28カ国が加盟しており、巨大な地域連合体として発展を続けている。近年、ユーロ危機への対応が国際的にも注目を集めたが、債務危機の再発防止策や銀行監督制度の運用など、通貨・財政の安定化へ向けて、引き続き課題が山積している。EU随一の経済大国として、過去を振り返りつつ、未来へ向けてドイツが果たす役割が、EUの命運を握っている。

通貨・財政の安定化が課題